

デジタル庁 御中

自治体における地域幸福度 (Well-Being) 指標活用実態の調査結果 報告書

2024年10月

三菱UFJリサーチ&コンサルティング

世界が進むチカラになる。



目次

- ・本調査の概要 p.2
- ・アンケート調査の設問一覧 p.5
- ・アンケート結果についての考察 p.11
- ・アンケート調査の結果 p.13
- ・ヒアリング結果についての考察 p.21
- ・ヒアリング調査の結果 p.23
- ・地域幸福度 (Well-Being) 指標活用推進に向けたまとめ p.40

本調査の概要

本調査の目的

地域幸福度 (Well-Being) 指標 (以下、地域幸福度指標) は、令和5年度には指標の新サイトの公開、ワークショップ・セミナーの開催等が実施されるなど、着実に普及しているが、まだまだ全国の自治体に広く認知・浸透しているとは言いがたい状況である。本調査は、地域幸福度指標活用の実態を調査・展開することにより、地域幸福度指標を活用している自治体および地域幸福度指標の活用を検討している自治体にとって参考となることを目的とする。

本調査は、デジタル田園都市国家構想交付金デジタル実装タイプ (Type2/3/X) 採択自治体、及びその他の地域幸福度指標を活用する団体を対象として、地域幸福度指標の活用実態に関する内容となっている。調査の具体的な目的は以下のとおりである。

- 地域幸福度指標を政策立案等に活用できている自治体の成功要因を抽出し、他自治体に展開する
- 地域幸福度指標の分析・活用方法に関する課題を識別し、改善の方法を見つけ出す

アンケート調査・ヒアリング調査の概要

アンケート調査

アンケート方式	Microsoft Formsを用いたオンラインアンケート
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> デジタル田園都市国家構想交付金Type2/3に採択された全自治体及びTypeXに採択された自治体の一部(75団体) 上記以外で個別調査を実施したことを把握している自治体(26団体)
調査期間	2024年5月16日～6月11日
配布・回収数	配布:101自治体 回収:77自治体 (回収率76%)

ヒアリング調査

ヒアリング方式	対面ヒアリング・オンラインヒアリング(自治体側の要望に応じて)
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用が進んでおり、他自治体にとって参考になる自治体(2自治体) 指標の活用が予定通り進んでいない自治体(2自治体) 広域自治体(1自治体)
調査期間	2024年6月26日～7月17日

アンケート調査の設問一覧

地域幸福度指標活用のきっかけについての設問

#	設問	選択肢
1	地域幸福度 (Well-being) 指標の存在を知ったきっかけを教えてください (複数回答可)	<ul style="list-style-type: none"> デジタル庁の資料・Slackなどをみた デジタル庁主催の地域幸福度 (Well-being) 指標活用説明会に参加した 他の自治体の取組み事例をみた 付き合いのある事業者から聞いた・提案を受けた スマートシティ・インスティテュートのホームページをみた スマートシティ・インスティテュートのイベントに参加した その他イベントに参加した その他(具体的に)
2	地域幸福度 (Well-being) 指標を活用すると判断された主な理由を教えてください (複数回答可)	<ul style="list-style-type: none"> 以前から独自にウェルビーイング・幸福度の取組みを進めており、関係する指標に関心があったから 政府や他の自治体でウェルビーイングを重視・活用する動きが強まっているから データを用いて地域の特性を把握したいと思ったから 施策の評価等に活用できるかもしれないと考えたから 住民向けのアンケート調査設計の際に参考にできるから 首長他幹部から指示があったから 付き合いのある事業者から勧められたから その他(具体的に)

* 問1、2は、「令和3年度補正または令和4年度補正のデジタル田園都市国家構想交付金タイプ2/3に採択されていますか」を「いいえ」と回答した者のみ表示

個別調査についての設問

#	設問	選択肢
3	令和5年度に独自のウェルビーイングに関するアンケート(以下、「個別調査」)を実施されましたか	<ul style="list-style-type: none"> • はい(→問4へ) • いいえ(→問10へ)
4	個別調査の実施方式をご選択ください	<ul style="list-style-type: none"> • インターネットやLINEなど電子的手法を利用 • 紙ベース・郵送 • 電子的手法と紙ベースの併用 • その他(具体的に)
5	個別調査の実施形態を選択ください	<ul style="list-style-type: none"> • 独自にウェルビーイングのアンケートを実施 • 既存の住民意識調査に設問を追加する形式で実施 • 他のアンケートと合わせる形式で実施 • その他(具体的に)
6	個別調査の実施者をご選択ください	<ul style="list-style-type: none"> • 自治体独自で実施 • 大学や学術研究者に依頼 • 調査会社・コンサルティング会社に依頼 • その他(具体的に)
7	個別調査実施にあたり、特に苦勞された点を教えてください(最大3つまで)	<ul style="list-style-type: none"> • アンケート実施の意義についての庁内での理解 • アンケート実施のための人員・予算確保 • 実施すべきアンケート設問の取捨選択 • アンケートの設計(実施方式・形態等の確定) • 独自アンケート設問の検討 • アンケートデータの回収・集計作業 • データ提出フォーマット用の加工作業 • 全国共通50問の集計結果の分析・解釈 • 独自アンケート設問の集計結果の分析・解釈 • その他(具体的に) • 苦勞した点は特にない
8	ご苦勞された点についてその理由を具体的にご記載ください	(自由回答)
9	今後も個別調査を実施する予定ですか	<ul style="list-style-type: none"> • 毎年実施予定 • 2-3年に一度実施予定 • 4年以上に一度実施予定 • 実施する予定はない • 未定

* 問4-9は、問3を「はい」と回答した者のみ表示

地域幸福度指標の活用状況全般についての設問

#	設問	選択肢
10	以下の地域幸福度(Well-being)指標の調査結果を活用した取組みのうち、貴方の自治体で実施した取り組みを教えてください(複数回答可)	<ul style="list-style-type: none"> データに基づく地域の現状分析 ダッシュボードを用いた他の自治体との比較 ロジックツリー等による自治体の施策等の検討 庁内勉強会・研修の開催 住民向けのワークショップ・研修の開催 ウェルビーイングについての住民向け広報活動 総合計画の策定での活用 <ul style="list-style-type: none"> まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定での活用 スマートシティ推進計画等、スマートシティのビジョン・目標策定での活用 予算編成での活用 その他(具体的に) 特になし
11	以下のうち、地域幸福度(Well-being)指標を活用して実現できたと思うことを教えてください(複数回答可)	<ul style="list-style-type: none"> まち全体を俯瞰し、まちの特徴を把握できた 行政目線ではなく、住民目線で指標のデータを分析できた 地域の課題についてデータに基づいた整理ができた ウェルビーイングの向上に寄与するための政策分野を識別できた ウェルビーイングに基づく政策づくりの意義について庁内の理解が深まった <ul style="list-style-type: none"> 政策の立案・評価のために指標を活用することが決まった 住民・地域のステークホルダーがウェルビーイングを意識するきっかけとなった 住民や民間企業が地域幸福度(Well-Being)指標を自分事化できた その他(具体的に) 特になし
12	実現できたと思うことについて、その理由をご記載ください	(自由回答)

地域幸福度指標の活用状況全般についての設問

#	設問	選択肢
13	地域幸福度 (Well-being) 指標の活用について、特に苦労された点を教えてください(3つまで選択可)	<ul style="list-style-type: none"> • ウェルビーイングがどういうことを意味するのかの理解 • 指標の仕組み・ツール等の理解 • 指標活用のための予算の確保 • 独自のアンケート調査の準備・実施 • アンケート結果の集計・加工・提出 • 指標データの分析 <ul style="list-style-type: none"> • 庁内の理解醸成 • 住民によるウェルビーイングの理解促進 • 指標分析を政策・予算に反映すること • 既存の取組みとの整合 • その他(具体的に) • 特になし
14	特にご苦労されたという部分についてその理由をご記載ください	(自由回答)
15	以下の地域幸福度 (Well-being) 指標の調査結果を活用した取組みのうち、今年度以降、実施を予定している取組みを教えてください(複数回答可)	<ul style="list-style-type: none"> • データに基づく地域の現状分析 • ダッシュボードを用いた他の自治体との比較 • ロジックツリー等による自治体の施策等の検討 • 庁内勉強会・研修の開催 • 住民向けのワークショップ・研修の開催 • ウェルビーイングについての住民向け広報活動 <ul style="list-style-type: none"> • 総合計画の策定での活用 • まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定での活用 • スマートシティ推進計画等、スマートシティのビジョン・目標策定での活用 • 予算編成での活用 • その他(具体的に) • 特になし

地域幸福度指標に関するツール等について

#	設問	選択肢
16	地域幸福度 (Well-being) 指標に関するツール・イベント等について、実際に活用されたものを教えてください(複数選択)	<ul style="list-style-type: none"> 3月29日に公開された)デジタル庁ウェブサイト上に公開されたダッシュボード スマートシティ・インスティテュートのウェブサイトのダッシュボード 地域幸福度 (Well-Being) 指標利活用ガイドブック 参考となるユースケースの一覧 分析作業用テンプレート
17	地域幸福度 (Well-being) 指標に関するツール・イベント等のうち、特に役に立ったものを教えてください(3つまで選択可)	<ul style="list-style-type: none"> 3月29日に公開された)デジタル庁ウェブサイト上に公開されたダッシュボード スマートシティ・インスティテュートのウェブサイトのダッシュボード 地域幸福度 (Well-Being) 指標利活用ガイドブック 参考となるユースケースの一覧 分析作業用テンプレート
18	地域幸福度 (Well-being) 指標サイト・ツール等についてのご意見・ご要望がありましたら、ご記載ください	(自由回答)

アンケート結果についての考察

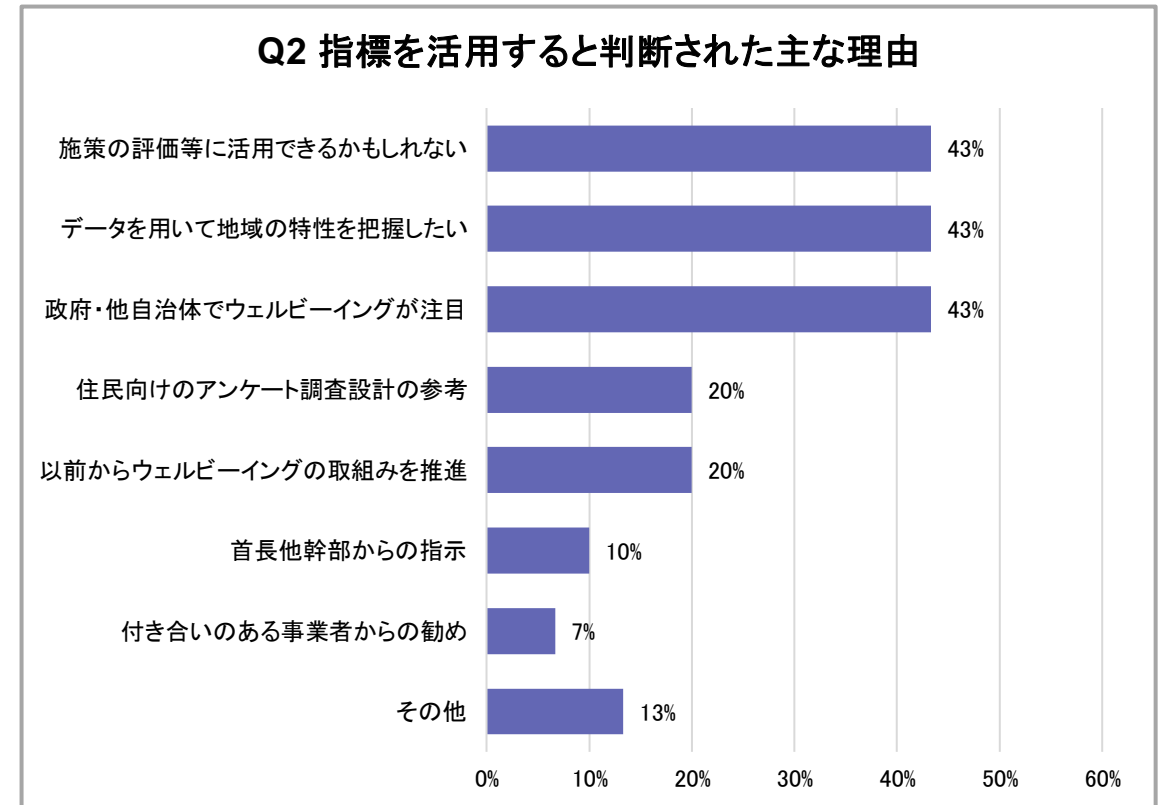
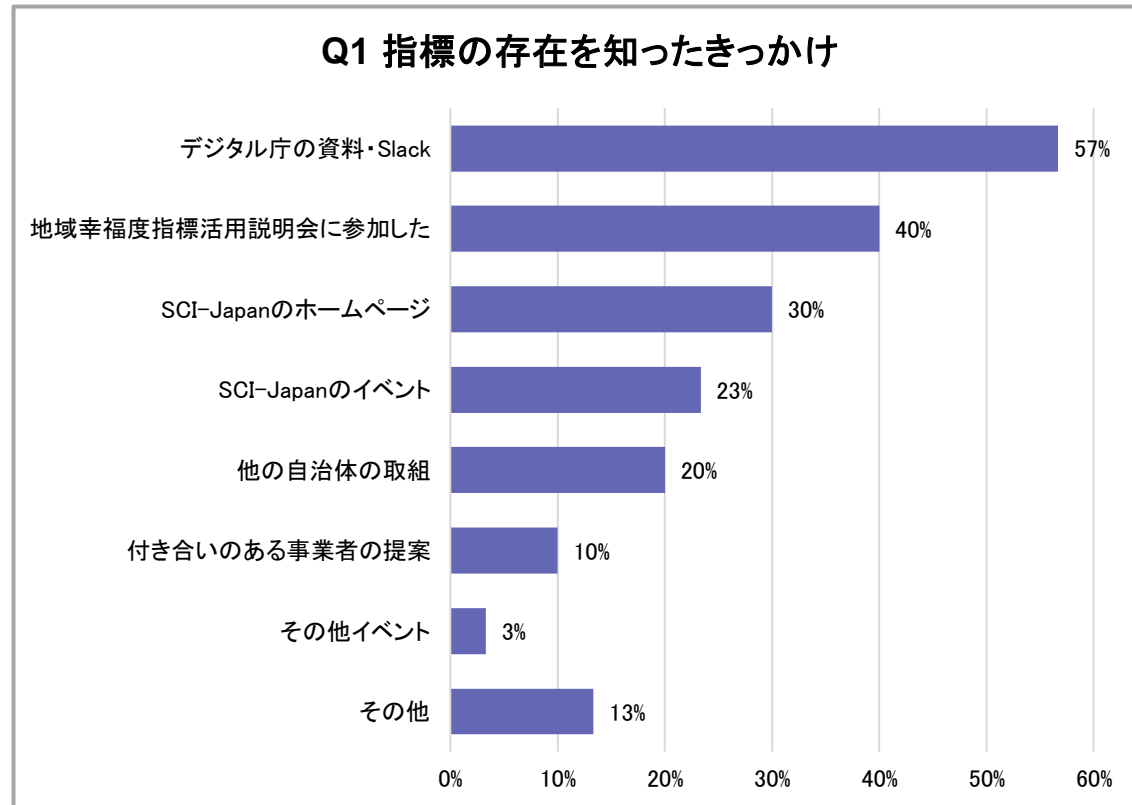
アンケート結果についての考察

- **【指標活用の理由】** 施策評価への期待、地域特性の分析、ウェルビーイングへの注目が、いずれも高い割合で挙げられている。地域幸福度指標のメッセージングは、施策評価の有効性とウェルビーイングの評価法の両面を推進することが重要と考える。地域幸福度指標について伝える手段は、デジタル庁資料・Slack、説明会、SCI-Japanウェブサイト等が有効の様子。
- **【アンケートの手法】** ほとんどの自治体がウェブアンケートを実施しており、過半数が調査会社を利用せず独自にアンケートを実施していることから、自治体が自ら設計・配布できるウェブアンケートツールの意義が示唆される。
- **【指標の活用状況】** 指標の活用においては、ダッシュボードを活用した現状分析が普及している。次のステップでもある、庁内での勉強会や研修も広がりを見せている。一方、総合計画等での活用は約10%にとどまり、指標を実際の政策に反映することが課題となっている。今後、政策への反映を予定している自治体が増加する予定であるため、それらをサポートする必要がある。また、住民向けワークショップや広報活動が限られており、住民を巻き込む取り組みの支援も課題である。
- **【実現できていること】** 地域の特徴把握、地域課題の整理、住民目線でのデータ分析等で、地域幸福度指標のデータ分析を実現できた自治体が比較的多い。一方、政策立案への活用やウェルビーイングの理解、住民による「自分事化」は10%未満にとどまっている。自由回答でも記載があるが、ウェルビーイングの理解と政策立案への活用に向けた研修が有効であると考えられる。
- **【苦労した点】** 指標やウェルビーイングの理解に関する課題が多く挙げられた。自由回答でも、指標の理解不足が政策への反映の妨げとなっていることが指摘されている。指標が説明されているツールが活用されていない割合も多く、積極的に普及を図ることが重要である。他に挙げた課題としては、データの分析、既存の取り組みとの整合、庁内の理解醸成、独自アンケートの実施がある。個別自治体の取り組みや本調査のヒアリング結果を公開することも有効だと考える。
- **【意見・要望】** 客観指標の充実、偏差値の上限等は、良し悪しがあるが、検討の余地はあると考える。

アンケート調査の結果

地域幸福度指標について知ったきっかけ・活用をしたきっかけ(デジ田Type2/3/X以外)

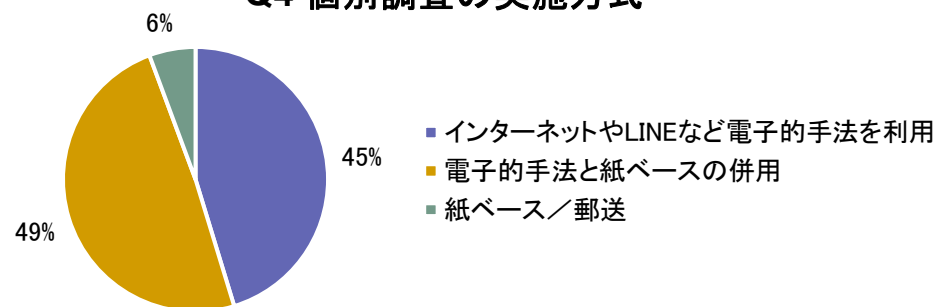
地域幸福度指標を知ったきっかけは、デジタル庁の資料・Slack(57%)、指標の説明会への参加(40%)、一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(以下、SCI-Japan)ホームページ(30%)が多い。指標を活用した理由は、施策評価への期待(43%)、データに基づいた分析(43%)、ウェルビーイングへの注目(43%)がいずれも同等に多い。



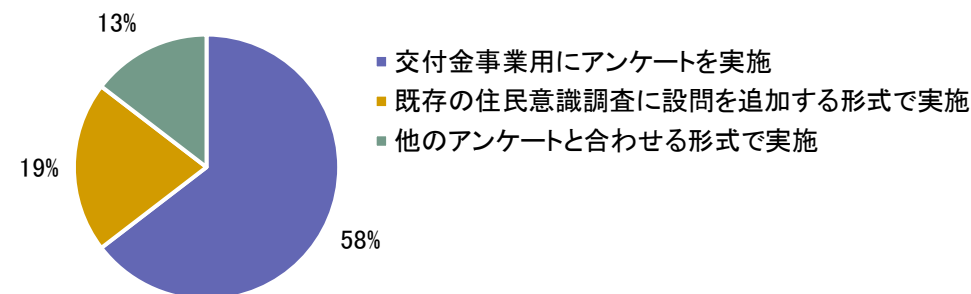
地域幸福度に関するアンケート調査の実施方法

個別調査を実施した自治体の94%がウェブアンケート（紙との併用を含む）を実施。58%が本事業のためにアンケートを実施し、残りは他のアンケートに追加した。64%が調査会社等を利用せず、独自にアンケートを実施している。

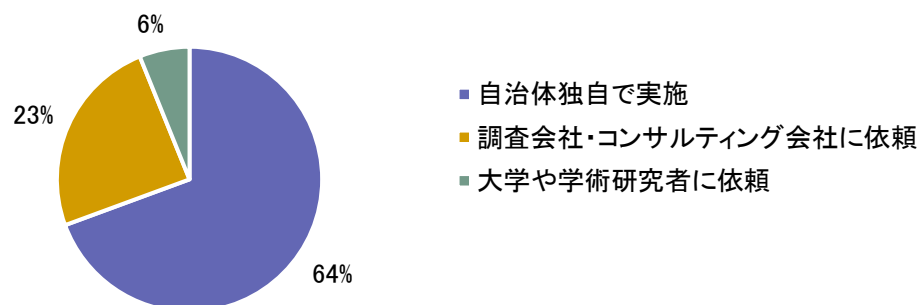
Q4 個別調査の実施方式



Q5 個別調査の実施形態



Q6 個別調査の実施者



Q7 個別調査実施にあたり、特に苦労した点

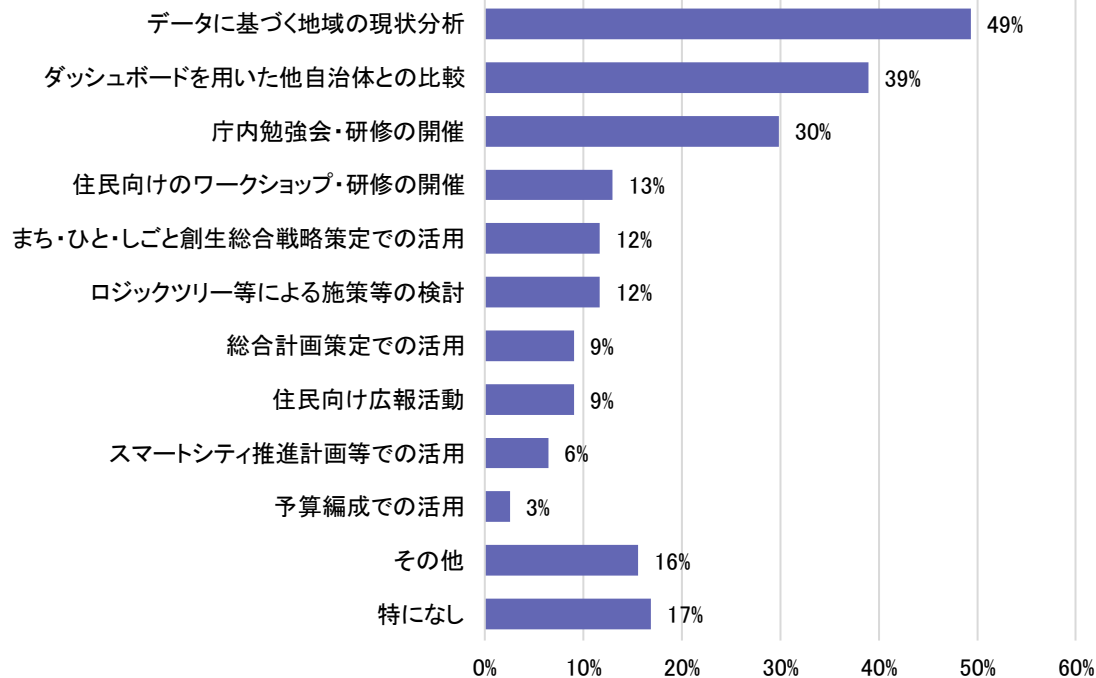
苦労した点	回答割合
実施すべきアンケート設問の取捨選択	34.0%
独自アンケート設問の検討	32.1%
全国共通50問の集計結果の分析・解釈	30.2%
アンケート実施のための人員・予算確保	24.5%
アンケートデータの回収・集計作業	24.5%
アンケート実施の意義についての庁内での理解	17.0%
データ提出フォーマット用の加工作業	11.3%
苦労した点は特にない	11.3%
独自アンケート設問の集計結果の分析・解釈	9.4%
その他	11.3%

地域幸福度指標の活用状況・活用の予定

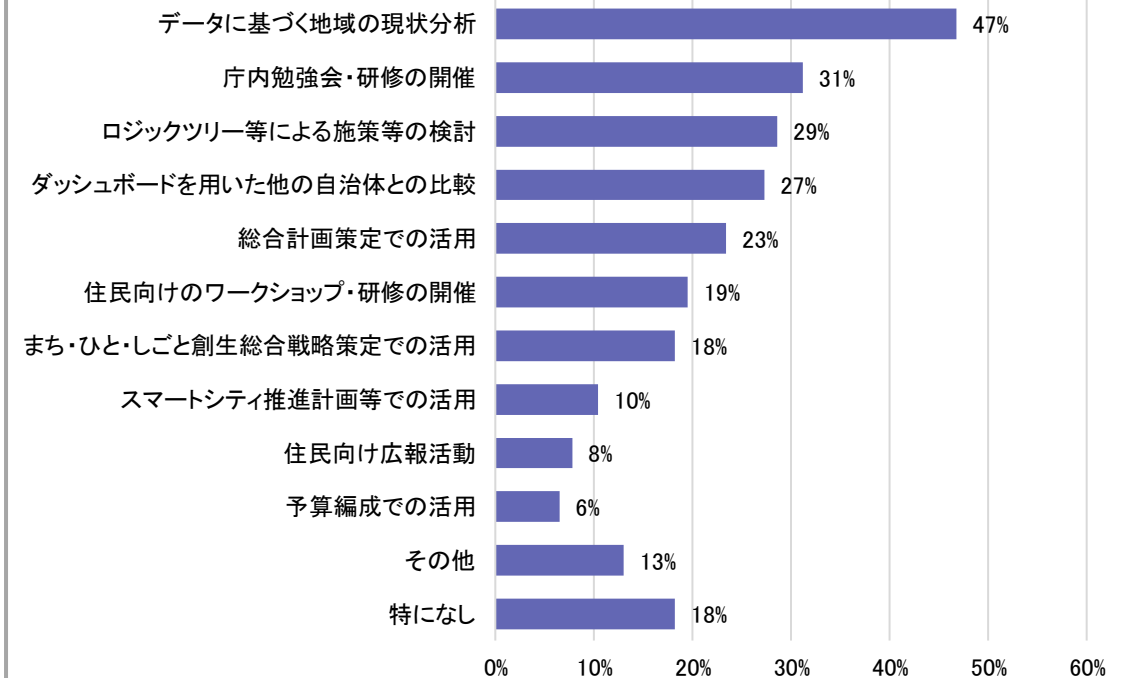
令和5年度に実施した取り組みとして、回答自治体の49%がデータに基づく地域の現状分析を実施し、39%が他自治体との比較をしていることから、ダッシュボードを用いた分析は普及していることがみられる。また、庁内の勉強会・研修も広がっている(30%)。一方、まち・ひと・しごと創生総合戦略や総合計画等での活用は10%前後に留まっている。

令和5年度以降の取り組みでも、データに基づく地域の現状分析が一番多い。一方、ロジックツリー等の活用が27%と令和5年度(12%)と比較して高い。また、まち・ひと・しごと創生総合戦略や総合計画等の活用も20%前後。

Q10 令和5年度に実施した取り組み



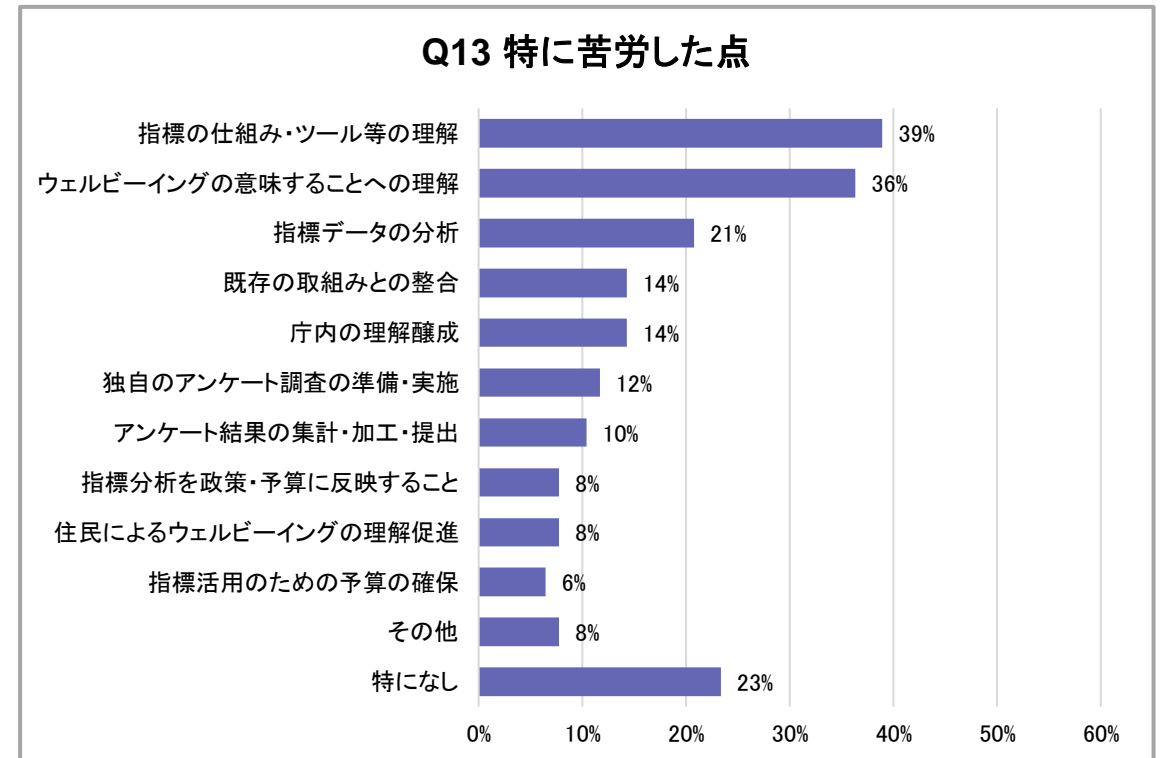
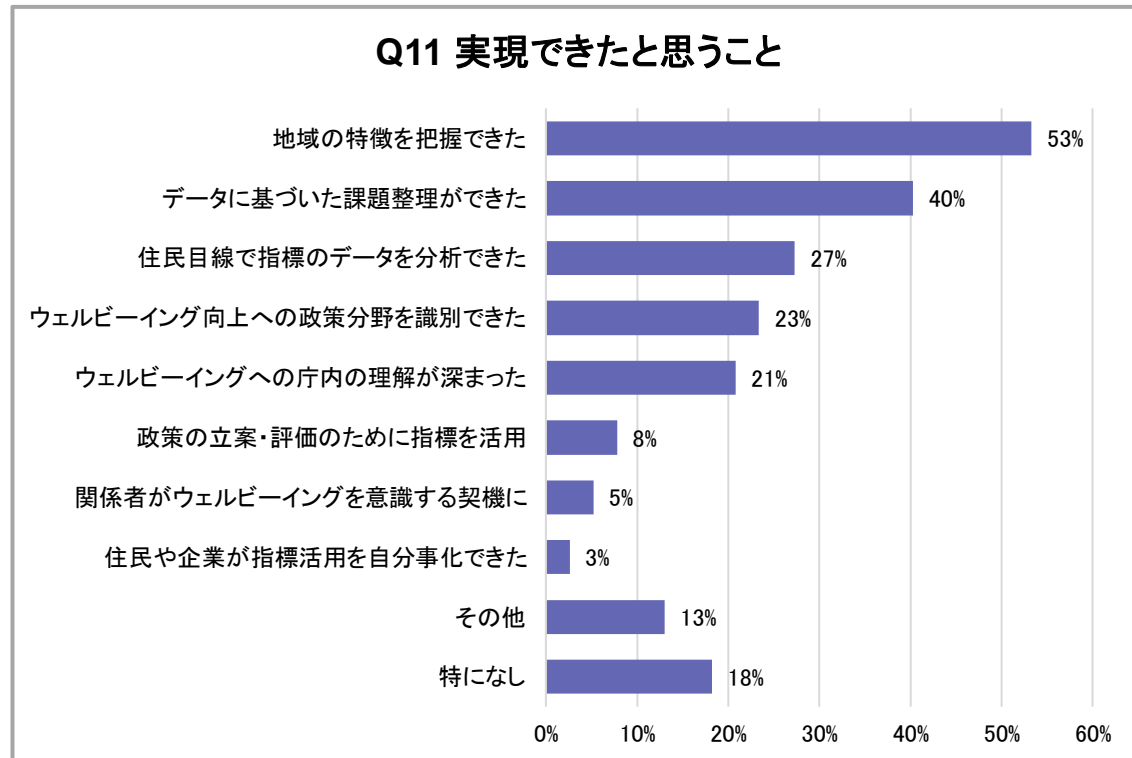
Q15 令和5年度以降、実施を予定している取り組み



地域幸福度指標の活用で実現できたこと・苦労したこと

指標活用で実現できたことは、多い順に、地域の特徴の把握(53%)、データに基づいた地域課題の整理(40%)、住民目線でのデータ分析(27%)。地域幸福度指標のデータ分析を実現できた自治体が比較的多い。一方、政策立案・評価での活用は8%、ウェルビーイングの理解は5%、住民等による自分事化は3%に留まった。

苦労した点は、指標の仕組み等の理解(39%)およびウェルビーイングの理解(36%)が多い。データの分析(21%)、既存の取組みとの整合(14%)、町内の理解醸成(14%)、独自アンケートの実施(12%)も比較的多い。



地域幸福度指標の活用で実現できたこと・苦勞したこと

実現できたことの理由(抜粋)

テーマ	コメント
データの分析	主観と客観の両面から指標を見ることで、地域の姿を偏重せず捉えることが可能と思われる
データの分析	地域の特徴を把握し、次年度の事業の設計に活用できた
庁内の理解	「市民が幸せに暮らせているか」等のものさしで、施策を捉えることが、徐々に庁内各課に広がって来ている
研修	研修・ワークショップにおいて、地域の幸福度を俯瞰し、それに基づき政策等の検討を行ったことで、理解が深まった
政策への反映	次期総合計画における各分野の具体的な計画等について、積極的に地域幸福度指標を活用していく方針

苦勞したことの理由(抜粋)

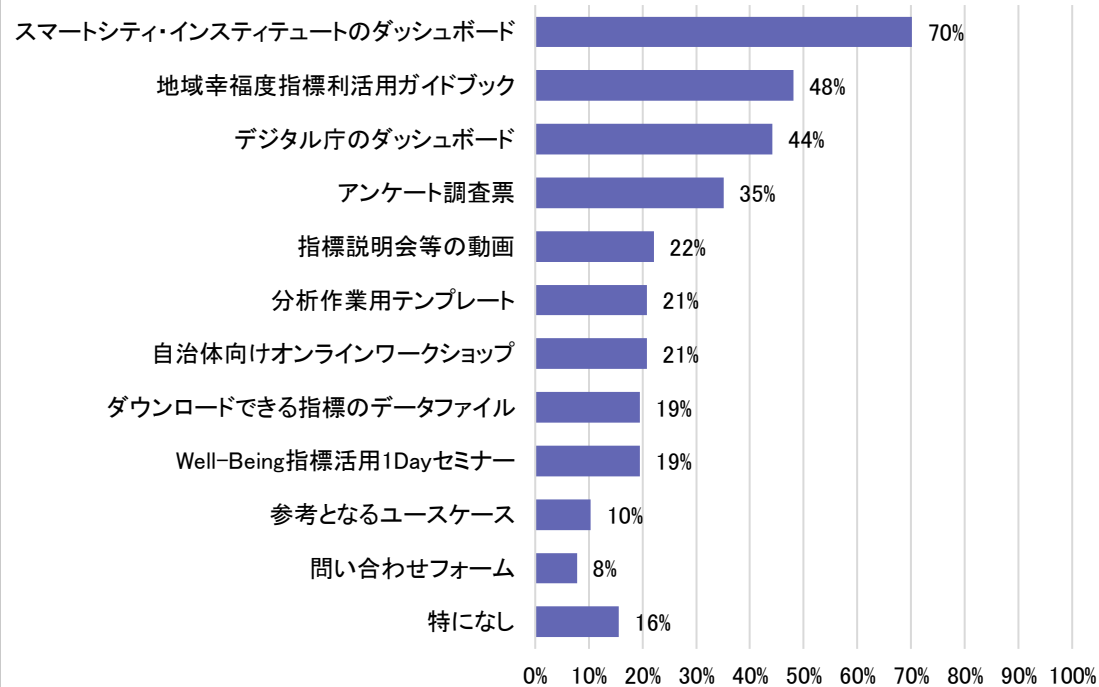
テーマ	コメント
指標の理解	指標を理解することに苦勞し、結果政策・予算に反映させることまで至らなかった
個別調査	アンケート調査を実施時に、どういった手法が効果的か、サンプル数をどうやって増やすかなどの検討に苦勞した
庁内の理解	実施の意義と結果の利活用について、 組織内での共通理解を進めるのが難しい
住民の理解	「Well-being」という言葉自体が職員及び市民に浸透しておらず、説明することに苦慮した
既存政策との整合	デジ田総合戦略の改訂に併せ、内容を現状として盛り込み、既存の計画と整合性を図った部分

地域幸福度指標に関するツール等について

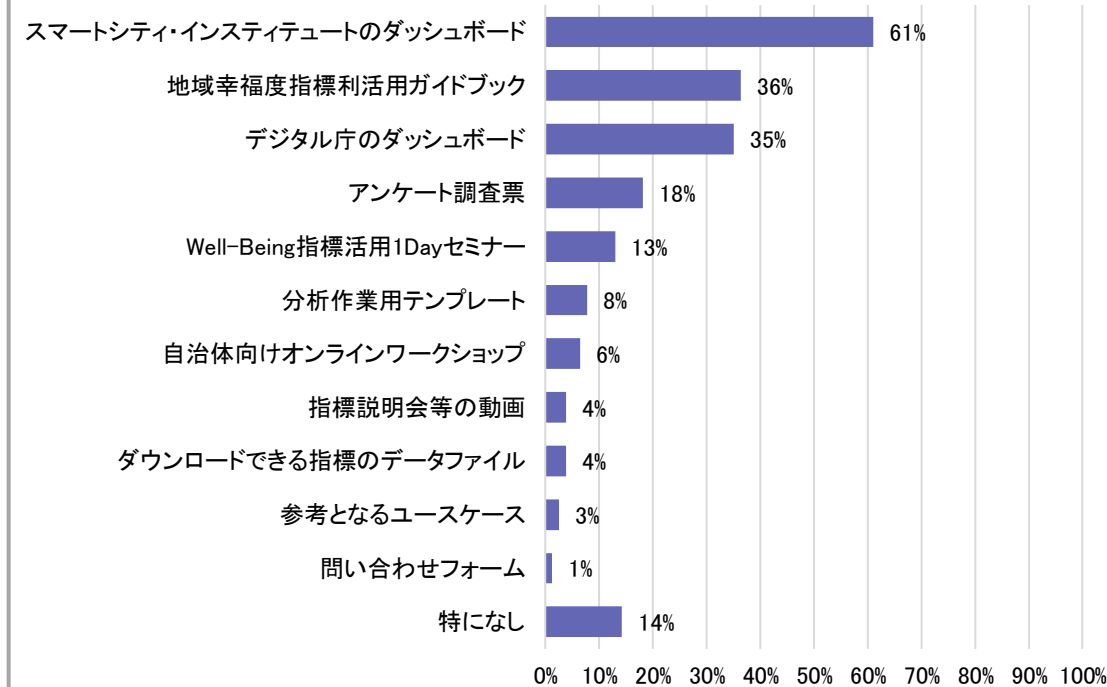
令和5年度の活用では、大多数の回答自治体がSCI-Japanのダッシュボードを活用(70%)。利活用ガイドブックやデジタル庁のダッシュボードも半数近くが活用。

役に立つツール等についても、SCI-Japan・デジタル庁のダッシュボードと利活用ガイドブックの回答が多い。アンケート調査票(18%)、1DAYセミナー(13%)、分析作業用テンプレート(8%)、オンラインワークショップ(6%)が続く。

Q16 実際に活用した地域幸福度指標のツール等



Q17 役に立った地域幸福度指標のツール等



地域幸福度 (Well-being) 指標サイト・ツール等についての意見・要望 (一部抜粋)

テーマ	意見・要望の内容
指標全体	客観指標の構成KPIが充実(例えば教育におけるソフト面など)されることで、より主観指標との関連が明確になるように感じます。
ダッシュボード	指標サイトについては好みの問題ですが、スマートシティインスティテュートの指標のほうが見やすいと感じました。
ダッシュボード	デジタル庁及びスマートシティ・インスティテュートのダッシュボードにおいて、レーダーチャート及びグラフで偏差値80を超えた場合に表示されない仕様となっているため、表示されるように改善してほしい。
ダッシュボード	各自治体ごとの幸福度と主観指標の相関、主観と客観指標の相関、年齢セグメントごとの主観と客観の相関があればと思います。
活用のサポート	テンプレートの説明を何度か受けたが、OASIS研修をおそらく流用しているのだろうと思われるが、テンプレートで使われている言葉の意味や定義がなく(例えば「ペルソナとは」など)具体的にどんな思考や考え方に基づいてテンプレートが作成されているのか説明会とテンプレートでは理解できず、利用しづらい。本当に分析やワークショップを効果的に行うことを求めるのであれば、その自治体個別ごとの伴走支援をお願いしたいところ。
活用体制	デジ田事業の一環としてwell-beingに取り組みましたが、内容としては企画部門の業務であると感じました。デジタル庁からデジタルの色合いが強い事業として降りてくると、情報部門が担うことになりやすく、その後庁内の役割分担がスムーズにいかないこともあり、結局情報部門がすべてやらなければならない、ということは最近よくあると感じています。

ヒアリング結果についての考察

ヒアリング結果についての考察

- **【個別調査の実施】** 個別調査の実施方法に最適解はなく、各自治体がそれぞれの制約の中で実施している。ウェブアンケートのみではデジタルデバイドの懸念があることから、紙媒体と併用した自治体が複数あるので、紙との併用ができるアンケートの仕組みが望ましい。個別調査の大きな課題である回収率の確保に向けて、市政モニターを活用する、アンケートを頻繁に実施している部署にメーリングリストを通じて協力を依頼する、子育て支援拠点等でアンケートを配布する等の対策が取られている。
- **【個別調査の実施】** 既存のアンケート調査に地域幸福度指標の設問を追加する場合、回答率を下げないために設問を取捨選択するケースもある。その場合、総合計画に関連する分野の設問を優先する等の基準で取捨選択している。可能な限り全設問を取り入れることが望ましいが、政策立案実現のためには、既存調査との整合性を保つための取捨選択も有効と考えられる。
- **【市民向けワークショップ】** 担当部署でのワークショップ企画が難しい場合、ワークショップに関心のある他部署と協働する事例もある。複数の自治体で、ワークショップの結果から、市民とまちを俯瞰し共通認識を持つために地域幸福度指標が有効であることが確認されている。また、ワークショップで出された内容をどのように政策に反映するか、着地点を意識することも重要。
- **【実現できた要因】** 政策に反映する際に成功した要因として、首長の姿勢が大きいことが明らかになった。首長がEBPM(エビデンスに基づく政策立案)を重視することで、アンケート結果が施策づくりに活用されている例もある。一方で、ボトムアップで他部署を巻き込みながらウェルビーイングを推進することは難しいとの声があった。首長に地域幸福度指標について理解してもらうためには、指標を活用している自治体の首長からの発信等が有効と考えられる。
- **【苦勞している点】** 重要課題として、庁内での理解を得ること、具体的な政策にどう反映するかが不明確であること、既存の取組みとの整合性が挙げられた。これに対しては、自治体職員が幅広く参加するウェルビーイングに関する研修や、政策との関連性を整理するためのロジックツリーなどが有効と考えられる。また、広域自治体特有の、市民との距離感や組織のあり方に関わる課題も挙げられている。広域自治体を対象とした研修や事例紹介も、今後検討すべき事項と考えられる。

ヒアリング調査の結果

ヒアリング対象

団体	デジ田 Type2/3/X 採択自治体	個別調査	ワークショップ	選定理由(アンケート結果をもとに選定)
埼玉県熊谷市	○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 「住民や民間企業が指標の活用を自分事化できた」と回答 今年度以降も「スマートシティ推進計画等、スマートシティのビジョン・目標策定での活用」を検討
宮城県仙台市	○	○	×	<ul style="list-style-type: none"> 実施した取組みは、「データに基づく地域の現状分析」に限られている 「ダッシュボードを含め、まだ理解が足りていないように感じている」と回答
岐阜県岐阜市	×	○	×	<ul style="list-style-type: none"> 本市独自のアンケート調査について、地域幸福度指標での調査項目の追加に合わせた、調査項目の取捨選択に苦労している 一方、予算編成での活用を実現している
静岡県菊川市	×	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 総合計画及びまち・ひと・しごと総合戦略の策定で活用しており、今後も活用予定 政策の立案・評価のために指標を活用することが決まった 指標の結果を活用して、今後住民向けワークショップを予定
鳥取県	○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 広域自治体の事例 結婚・出産・子育てや移住定住施策等を若手目線で企画・立案することを目的として設置された「とっとり未来創造タスクフォース」の若手県職員と結果を共有

熊谷市のヒアリング結果（1/3）

ヒアリングの概要

ヒアリング日時	2024年6月26日（水） 10:00～11:30
実施形式／場所	現地／熊谷市役所
対象者	熊谷市総合政策部企画課
ヒアリング項目	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用内容 個別調査の実施手法・苦労した点等 ワークショップの内容・効果 住民や民間企業が指標の活用を自分事化できた要因 指標活用に向けて難しいと感じているところ 今後の指標活用の予定

ヒアリング回答の要点

地域幸福度指標の活用内容	<p>指標活用については、個別調査を実施し、実態把握を行った。この結果を踏まえて市民ワークショップ（以下、WS）を開催した。WS結果を庁内関係部署と共有し、併せて庁内ヒアリングを行った。「スマートシティ推進」のキーワードを踏まえつつ、今後取り組む施策をビジョンマップとして作成し、5年以内に実施する取り組みを視覚的に表現した。視覚的なマップに表現することで、市民にわかりやすいものになると考え、ビジョンマップを作成した。</p>
--------------	--

熊谷市のヒアリング結果（2/3）

ヒアリング回答の要点

<p>個別調査の実施手法・苦勞した点等</p>	<p>ネットアンケートのみだとデジタルデバイドが発生し、リーチしたい層の意見を取り込めない可能性があった。よって、紙ベースのアンケートも併用した。この紙アンケートを配りに行く際に、アンケートの趣旨説明をする必要があり、子育て支援拠点や老人入所施設等、結構な箇所数となったため、労力を要した。</p> <p><u>子育て支援拠点への配付については、小さい子供のいる家庭の保護者は子育てが忙しく、ゆっくり時間をかけて回答することが困難であるため、子育て支援拠点にいる施設職員が子供を見ている間に、母親に紙アンケートを実施してもらった。</u></p> <p>令和6年度も実施したが、<u>ウェブ回答のみとした。</u>個別調査結果が市政にどう反映されるのかが市民に十分伝わらなかったためか、回答数が大幅に減った。</p>
<p>ワークショップの内容・効果</p>	<p>若年層からの意見集約というところを考慮し、<u>WSの対象は、あえて年齢構成を40代以下に限定した。</u>WSは、平日開催のAグループを2回、土曜日開催のBグループを2回の合計4回実施した。</p> <p>WSの内容は、地域幸福度指標に基づく調査結果を用いてまちを概観し、熊谷市の取組を説明しつつ、参加者が気になる分野を聞いた。そのうえで、ここからどのような行政の取組が必要であるか議論してもらった。</p> <p>結果については、スマートシティ推進を中心とした施策に市民の声を反映するために、関係する部署と対話を実施した。</p> <p>一方、<u>WSの参加者集めに苦勞した。媒体は紙のチラシとウェブサイト。</u></p>

熊谷市のヒアリング結果（3/3）

ヒアリング回答の要点

住民や民間企業が指標の活用を自分事化できた要因	完全にウェルビーイングのことを住民が遍く考え始めたわけではないと思うが、今回の調査を市が行ったことと、市報で特集したことをきっかけとして、それに触れた住民が自分のウェルビーイングを考えるきっかけになったのではないかと感じる。
指標活用に向けて難しいと感じているところ	本取組について、職員間でも理解度に差がある。そもそも「ウェルビーイングって何」というところから反応が違ふ。各部署も限られた時間で担当事業に対応していることから、ウェルビーイングを熟慮する時間を持たないため、職員間での意思統一が難しい。 説明が行き届かない職員に向けては、幸福度に紐づいた各指標（因子・KPI）を示して説明した。レーダーチャートで低い分野については、市民の満足度が低いという説明を行った。地域幸福度（Well-Being）指標だけだと抽象的すぎるが、レーダーチャートの形で可視化されているため説得力がある。可視化されているものを見せつつ対話するのがスムーズであると感じている。
今後の指標活用の予定	毎年、前年度の事務事業見直しと新規事業の立案を行っているが、その際に使うこととしている。個別調査結果を各部署に共有し、市民のウェルビーイング向上に資する視点で事業を検討してもらう。新しい事業立案のヒントとしての活用や、事業見直しの際にも、既存の事業について“工夫”をしてもらうために、アンケート結果を参考にしてもらうイメージ。 毎年個別調査を行っても、すぐには結果（スコア）が変わっていかないと考えている。相当長い目で見ないと、政策の寄与がわからない。アンケートの頻度は3年とか5年に1回が妥当か。例年実施している総合振興計画のアンケートでも、スコアの大幅な増減は見られない。

仙台市のヒアリング結果（1/3）

ヒアリングの概要

ヒアリング日時	2024年6月28日（金） 13:30～14:45
実施形式／場所	オンライン
対象者	仙台市まちづくり政策局政策企画部プロジェクト推進課・政策企画課
ヒアリング項目	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用内容 個別調査の実施手法・苦労した点等 指標活用に向けて難しいと感じているところ 今後の指標活用の予定 指標全体や活用ツールに関する要望

ヒアリング回答の要点

地域幸福度指標の活用内容	<p>個別調査をR6の2月に行った。<u>市政モニター（397名）を対象に実施したアンケート調査結果をダッシュボードにもアップロードした。全国調査・独自調査についてサマリーやSWOT分析について実施した。タイプ2で実装段階に取り組む中で、オンラインの説明会等にも参加して分析が必要だと感じ、分析作業用テンプレートを使ってみた。</u></p> <p>テンプレートに反映したのが最近なので、庁内には展開していないが、アンケート結果は報告書の形でホームページに公表している。</p>
--------------	---

仙台市のヒアリング結果（2/3）

ヒアリング回答の要点

個別調査の実施手法・苦勞した点等	<p>アンケート調査の予算の措置がされてない中で、サンプルを300以上集められる手段として市政モニターアンケートを活用した。独自調査は、毎年実施し、経年変化を把握したい。アンケート結果は、基本計画の検討に活用したい。ただし、具体的な施策への落とし込み方がハードル。自治体が考える部分かもしれないが、サポートがあるとよい。</p> <p>一方、高齢の方の場合、紙での回答が多く、回収・入力に労力を要するが、様々な年齢層から回答をいただくために紙媒体も必要と考えている。作業量は把握できたので体制を整える必要がある。</p>
指標活用に向けて難しいと感じているところ	<p>テンプレートを使ってSWOT分析はやってみたが、それがどういうことを意味するかの読み取りに苦勞した。1点目は施策に落とし込んだりする際に、建設局、観光局などに落とし込み・フィードバックをしていく必要があるが、SWOTだけだと具体的なところまで落とし込みにくかった。2点目は、コンサルに委託している自治体が多いと感じるが、厳しい財政状況を踏まえると、自前でできればよいと思う。</p>
今後の指標活用の予定	<p>現時点で具体的な活動のイメージはないが、2031年からの次期総合計画の検討に向けて、Well-Beingという概念についてもこのような機会を利用しながら勉強していけたらと思う。</p>

仙台市のヒアリング結果（3/3）

ヒアリング回答の要点

指標全体や活用ツールに関する要望

以前のページに比べて、デジタル庁のサイトは庁内環境でも見やすくなったと思う。分析を進めるうえで、テンプレートを使っていくのは手数かかるので自動的に吐き出せたりできれば手間が少なくなると感じている。
「誰でもわかるWellbeing」のような、市民が見てもわかるツールがあれば庁内や対市民での説明がしやすい。
また、ボトムアップで進めていく方法については、多くの自治体が悩んでいるところだ。市民向けのWSをしたという結果ではなくて、どうやって課内や庁内で働きかけをしたかといったようなプロセスが知りたい。
他都市や海外での活用事例を紹介する資料があると良い。
(WSへのファシリテーターの派遣などについて)ウェルビーイングは、今後のまちづくりを考えるうえで、重要な視点の一つであると考えている。庁内の理解を得るために、WS等は有効な手段であるので、ファシリテーターの派遣はありがたい。

岐阜市のヒアリング結果（1/3）

ヒアリングの概要

ヒアリング日時	2024年7月4日（木） 10:00～11:30
実施形式／場所	オンライン
対象者	岐阜市企画部総合政策課
ヒアリング項目	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用内容 指標を活用したきっかけ 個別調査の実施手法・苦労した点等 政策に反映できた要因 指標活用に向けて難しいと感じているところ 今後の指標活用の予定 指標全体や活用ツールに関する要望

ヒアリング回答の要点

地域幸福度指標の活用内容	<p>平成25年度（2013年度）から幸福度を含めた市民意識調査を毎年実施している。この結果を各種計画策定や事業構築の際に全庁的に活用している。</p> <p>令和5年1月、SCI-Japanの南雲氏をアドバイザーに委嘱、分析方法等アドバイスをもらいながら、地域幸福度指標も参考にした市独自の市民意識調査を実施している。</p>
--------------	--

岐阜市のヒアリング結果（2/3）

ヒアリング回答の要点

<p>地域幸福度指標の活用内容</p>	<p>令和6年3月、<u>地方版総合戦略にあたる「岐阜市未来創生総合戦略」を策定し、主観指標と客観指標をKPIに設定している。</u> 従来の市民意識調査項目に地域幸福度に位置付ける調査項目を一部追加するとともに、<u>幸福度や生活満足度について、5段階での調査していたものを11段階に変更し、各設問との相関関係も分析している。</u>以前から幸福度と各施策の関連性の分析方法について課題意識があったことから、その課題解決の一助にもなっている。 EBPMを重視する中で、基礎自治体ベースで毎年度測定可能なデータはかなり少ないことから、こうした市民意識調査に取り組むことで、毎年度データを得られている。</p>
<p>指標を活用したきっかけ</p>	<p>令和4年夏に南雲氏と市長との対談を契機とし、前述のとおり、同氏をアドバイザーとして委嘱。 地域幸福度指標をそのまま活用しているわけではなく、同指標を参考に、市独自の市民意識調査に取り組んでいる。</p>
<p>個別調査の実施手法・苦勞した点等</p>	<p>市民意識調査は、地域幸福度指標の調査項目と、これまで実施してきた調査項目を照らし合わせながら取捨選択している。設問数を増やすことは、回答率の低下につながる一方で、すでに活用されている調査項目を削除することは困難であることから、調査項目の取捨選択に苦勞している。 地域幸福度指標の設問は、<u>各自治体の相対的な特性を把握するもの</u>と考えている。本市では、市民意識調査で独自に経年変化を測ってエビデンスの1つとして活用している。</p>

岐阜市のヒアリング結果（3/3）

ヒアリング回答の要点

個別調査の実施手法・苦勞した点等	令和5年度から、地域幸福度指標に合わせて設問の選択肢の順番を変えた。「どちらともいえない」を以前の5番目から3番目の選択肢に変更したことで結果に変化が生まれており、経年変化を測ることを目的としている 市民意識調査において、設問の選択肢を全て地域幸福度指標に合わせることは難しい と考えている。
政策に反映できた要因	岐阜市では、予算編成方針のキーワードにEBPMを掲げるなど、ワイズ・スペンディングによる持続可能な行財政運営に取り組んでいる。 そうした中で、エビデンスの一つとして市民意識調査が活用されている。
指標活用に向けて難しいと感じているところ	地域幸福度指標の活用に向けて、客観指標は毎年度得られるデータが少ないことに課題を感じている。 例えば経済センサスは5年おきに実施され、結果も実施した数年後に公表されていることがあげられる。
今後の指標活用の予定	市民意識調査は、11件法による幸福度の設問を中心に毎年実施していきたいと考えている。そのほかの設問についても、庁内での活用状況等を加味しながら、毎年度見直しの検討を進めていきたい。
指標全体や活用ツールに関する要望	地域幸福度指標は、現在の偏差値に加え、実数値についても公表いただきたい。

菊川市のヒアリング結果（1/3）

ヒアリングの概要

ヒアリング日時	2024年7月11日（木） 13:30～15:00
実施形式／場所	現地／菊川市役所
対象者	菊川市企画財政部企画政策課
ヒアリング項目	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用内容 指標を活用したきっかけ 個別調査の実施手法・苦労した点等（昨年度） 個別調査の実施手法・苦労した点等（今年度予定） ワークショップの内容・効果 政策に反映できた要因 指標全体や活用ツールに関する要望

ヒアリング回答の要点

地域幸福度指標の活用内容	<p>活用した活動では、新しい総合計画の策定を進めており、市民WSを実施している。WSの各グループでの取り組み検討の中で、資料の一つとして提示する予定にしている。WSは区分として、①市民団体（地域のNPO団体のほか、コミュニティ協議会（自治会ではない）の代表など）、②高校生（市外に位置する高校に通う菊川市出身高校生含む）、③企業・市職員という分けで実施予定である。また、③は共同研修の一環として実施している。</p> <p>また、現在策定作業中の総合計画では、政策を達成しているか否かの指標として活用しようと思っている。</p>
--------------	--

菊川市のヒアリング結果（2/3）

ヒアリング回答の要点

指標を活用したきっかけ	<p>デジタル庁に出向した職員から情報は入ってくるが、実際にできるかどうか、と迷っていた。</p> <p>現在の総合計画やそれに関する調査で「住みやすさ」に関してはデータが溜まってきたところ、次に何を指標としてすべきかを迷っていた時、ウェルビーイングを導入しようという話になった。アレンジが可能ということで、言葉を変えたりしながら極力オリジナルを尊重しながら検討した。</p> <p><u>まちの現状を知って、対策を考えるという基本のストーリーがあるので、現状分析の情報提供として使えるのではないかと</u>思っている。アンケート実施時から、WSの資料として使おうということ自体は予め見通していた。</p>
個別調査の実施手法・苦労した点等（昨年度）	<p>設問の取捨選択は、聞きづらい内容だというようなものは落とした。最終的に総合計画の審議会の委員にも確認した。全体の設問数を減らしたいという意図もあった。2000サンプルのうち、1000サンプルは集めたかったので、<u>回収数を確保するためにそのまま50問訊くのは難しいと判断した。</u></p> <p>ウェルビーイングの理解促進のために説明のページを入れたが、理解をして頂けたかどうかは心配である。</p>
個別調査の実施手法・苦労した点等（今年度予定）	<p>総合計画策定のため、<u>今後は50の設問に加えて、各自治体の独自指標も参考にしながら、地域幸福度指標に関するアンケートを実施する予定である。</u>総合計画では28の設問にしたが、改めて精査する。</p> <p>一方、スポーツ・消防に関してカバーされていないと思った。スポーツは文化・芸術の指標のところで読み替えたりした。また、住環境についても、行政的に見ると道路・ライフラインというような細分化が必要なケースもある。福祉の中で、障がい者福祉・高齢者福祉など含まれるものがある。足りないところは補っていく必要がある。また、苦労している点として、住民・市民の皆様にそもそもウェルビーイングという言葉が浸透していないと思われる。その中で理解が必要だと書かせていただいている。</p>

菊川市のヒアリング結果（3/3）

ヒアリング回答の要点

個別調査の実施手法・苦労した点等（今年度予定）	まだ展開はしていないが、目的(KPI)に対して、この文言であっているかという確認を行っていく。令和7年に現状値調査を実施する予定である。それを現状値把握のデータとし、目標値を立てたうえで、総合計画の成果を測るために令和9年に実施予定である。
ワークショップの内容・効果	高校生のWSは、放課後に実施したので16時～18時の2時間。取組みの検討だけでなく、現状、課題なども挙げてもらった。指標に関しては本来ならもっとダッシュボード触ったり、取組を検討する上でペルソナ設定できたらいいと思うが、時間の関係上、そこまでは至れなかった。SWOT分析のところにも最も反響があった。グループごとに8分野のテーマを決めて色分けしているものを配ったので、何が課題かがわかりやすく示すことができた。
政策に反映できた要因	当初の地域幸福度では、設問が多すぎたが、 項目が減ったタイミングと総合計画の指標・アンケート検討タイミングと重なったことが大きい。
指標全体や活用ツールに関する要望	①調査報告書の中で「カテゴリー別独自設問の参考事例」を出してもらっているが、参考にしているなかで、もう少し 細分化した因子別の事例集 があると他の市町にも参考になりうる。②データを落とすときに、近隣の菊川市・御前崎市・牧之原市を 複数選択してその中で偏差値化 するということはあるか。検討の中で比較しやすくなると考える。

鳥取県のヒアリング結果（1/3）

ヒアリングの概要

ヒアリング日時	2024年7月17日（水） 14:00～15:30
実施形式／場所	現地／鳥取県庁
対象者	鳥取県政策戦略本部デジタル局兼行政体制整備局デジタル改革課・とっとり未来創造タスクフォース
ヒアリング項目	<ul style="list-style-type: none"> 地域幸福度指標の活用内容 個別調査の実施手法・苦労した点等 ワークショップの概要・結果 他部署を巻き込んだ指標活用の要因 指標活用に向けて難しいと感じているところ 今後の指標活用の予定 指標全体や活用ツールに関する要望

ヒアリング回答の要点

地域幸福度指標の活用内容	<p>令和4年度補正デジタル田園都市国家構想交付金TYPE2の要件であるWS実施と主観指標アンケート結果の公表を実施。</p> <p>主観指標アンケートを地域幸福度（Well-Being）県民アンケート調査として実施した。集計結果と想定していた結果との相違の確認や近隣自治体・人口規模が類似している自治体などと結果の比較を実施した。</p> <p>WSは、庁内で部局横断的に若手目線で施策を企画・立案している「とっとり未来創造タスクフォース」とデジタル担当部署が共同で実施。</p>
--------------	---

鳥取県のヒアリング結果（2/3）

ヒアリング回答の要点

個別調査の実施手法・苦勞した点等	<p>主観指標アンケートは、50問と設問数が多いため、アンケートを回答するにあたってのハードルが高いという懸念があった。アンケート実施にあたっての委託予算がないことや集計の事務作業を考慮し、電子アンケートで実施した。</p> <p>回答集計にあたっては、<u>県HP・県公式LINEでの周知や県政参画電子アンケート会員に展開するとともに、県内市町村にも住民への周知をお願いするなど、多方面にアンケート回答依頼を実施した。</u></p> <p>結果としては、想定以上の回答数が得られたが、回答数が確保できるかは当初から不安要素であった。</p>
ワークショップの概要・結果	<p>WSは、アンケート結果概要を確認したうえで、気づいた点などについてのディスカッションを中心に実施した。全国調査（国調査）と個別調査（県調査）の主観因子別の結果が大きく異なったため、アンケート調査の方法によっては、結果に偏りが生じてしまう懸念もある。</p> <p>今回の電子アンケートの回答者は高齢者層の回答が多く、若年層の回答は少なかった。</p> <p>主観・客観因子は全国一律で比較できるので、そういった比較は興味深い。</p> <p>デジタル庁の研修ではロジックツリーなど求められていたが、<u>いきなり高い視座で施策に繋げていくというよりは、アンケート結果を一つの指標として捉え、他の情報も活用しながら、施策に活かしていくための一つのツールとして利用したいと考えてWSを企画した。</u></p>
他部署を巻き込んだ指標活用の要因	<p>デジタル田園都市国家構想交付金デジタル実装TYPEを所管しているデジタル担当部署が主導でWSを実施したが、部局横断的に施策立案などを実施している部署と協働した方が効果的であると考えた。</p> <p>他県もデジタル部門が所管している部署が多いようで実施方法には苦勞されていると聞いている。</p>

鳥取県のヒアリング結果（3/3）

ヒアリング回答の要点

他部署を巻き込んで指標を活用できた要因	今回は、タスクフォースが鳥取県の30年後の姿から逆算的に政策を企画するバックキャスト型の政策立案を推進するためのWSの予算を要求しているという情報を得て打診を行った。WSに興味関心がありそうな部署を巻き込んでいくということが必要であると考えている。
指標活用に向けて難しいと感じているところ	基礎自治体は取組みやすいが、広域自治体は、直接まちづくりに関与する場面が少ないため本指標の活用が難しいと感じる。 基礎自治体の取組では、地域特性を活かしたブランディングを実施している団体もあるが、県全体だと輪郭がぼやけてしまう。子育て施策などは市町村がメインになってくるといった要素もある。
今後の指標活用の予定	若者県民メンバーとともに鳥取県の未来の姿を描いていく、タスクフォース所管の「とっとり未来予想図プロジェクト」にて、現在の鳥取県をデータとして捉えた参考資料としての活用を行っており、今後も必要に応じて活用を検討する。
指標全体や活用ツールに関する要望	客観指標の根拠に乏しいデータも用いられていることから、データ項目を増やす・変更するなど強化していただきたい。また、HPで公開されている個別調査・全体調査というカテゴリーが分かりにくいいため、分かりやすい名称にしていただきたい。

地域幸福度 (Well-Being) 指標活用推進に向けたまとめ

地域幸福度 (Well-Being) 指標活用に向けたまとめ

- アンケート結果から、地域幸福度指標のダッシュボードを活用した現状分析は比較的普及していることが確認された。一方で、指標を実際の政策に反映している自治体はまだ少数にとどまっている。また、多くの自治体で共通して見られた課題として、指標やウェルビーイングの理解不足が挙げられる。
- ヒアリング調査では、政策に指標を反映できている自治体では、首長の後押しが成功要因の一つとなっていることが見られた。一方で、首長の支援がない自治体でも、地域幸福度指標のデータを総合計画のKPIに活用したり、新規事業の検討に用いる予定の事例も報告されている。活用における主な課題としては、庁内での理解の浸透や、具体的にどう政策に反映するかが不明確であること、既存の取り組みとの整合性が挙げられた。
- ダッシュボードを活用した分析から政策への反映を進める自治体を増やすためには、ウェルビーイングに基づく政策立案のための研修や、政策を整理するためのロジックツリーの導入が効果的だと考えられる。また、本調査で紹介した自治体の事例を示すことで、他の自治体が地域幸福度指標を活用する際の参考になると考えられる。

<参考> 自治体向け地域幸福度指標オンラインワークショップへの本調査結果の反映

6月～7月に実施した自治体向け地域幸福度指標オンラインワークショップでは、本調査の結果を踏まえ、以下の点を考慮して内容を調整した。

- 「指標の仕組み・ツール等の理解」および「ウェルビーイングの意味することへの理解」が、特に苦労した点として上位に挙げられた。
⇒SCI-Japan南雲専務理事のプレゼンテーションでウェルビーイングの意味を強調し、事務局からは指標の仕組み等を記載している利活用ガイドブック等のツールについて説明を行った。
- 役に立ったツールとして、ダッシュボードに加えて、アンケート調査票、利活用ガイドブック、分析作業用テンプレート等も挙げられた。
⇒事務局による説明では、ダッシュボードだけでなく、上記ツールも併せて紹介した。
- ヒアリング調査において、「SWOT分析まではできても、具体的な政策をイメージすることが難しい」というコメントが見られた。
⇒指標活用編のワークショップでは、原型であるOASIS研修の流れを調整し、最終的に優先分野に対する施策や評価KPIなどをブレインストーミングする内容に変更した。

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社

www.murc.jp/

録画・撮影・キャプチャーなどの行為、資料の二次利用を固くお断りいたします。